進修同窓会々報

発行 土浦一高進修同窓会　編集人 同窓会会報編集委員会　委員長 横田尚義　印刷 常陽新聞社

（大久保写真館提供）

―目　次―

2面　平成13年度総会報告
3面　会長あいさつ
4面　学校長あいさつ
　　目からウロコが落ちた話
　　日本ユーラシア協会副会長
　　東郷正延（中学・26回卒）
5面　恩師を訪ねて⑥
　　山崎長次郎先生（昭和15～33）
6面　卒業生レポート⑥
　　太田聡史（高32回）
7面　支部だより
8面　おしらせ　おたより
9～11面　母校だより
12面　平成12年度決算書等

土浦一高校歌

堀越　晋　作詞
尾崎　楠馬　作曲

一、沃野一望数百里　関八州の重鎮とて
　そそり立ちたり筑波山　空の碧をさながらに
　湛えて寄する漣波は　終古渝らぬ霞浦の水

二、春の弥生は桜川　其の源の香を載せて
　流に浮ぶ花筏　蘆の枯葉に秋立てば
　渡る雁声冴えて　湖心に澄むや月の影

三、此の山水の美を享けて　我に寛雅の度量あり
　此の秀麗の気を享けて　我に至誠の精神あり
　東国男児の血を享けて　我に武勇の気魄あり

四、筑波の山のいや高く　霞ケ浦のいや広く
　嗚呼　桜水の旗立てて　我が校風を輝かせ
　亀城一千の健男児　亀城一千の健男児

平成十三年度 進修同窓会総会開かれる

去る四月八日（日）、平成十三年度定期総会が、母校体育館にて約三〇〇名の会員出席のもとに盛大に開催されました。

まず、応援指導部の指揮のもと、ブラスバンドの演奏に合わせ、校歌と一高讃歌の斉唱、物故会員に対する黙祷ののち、幡谷祐一会長・三輪志郎校長の挨拶があり、豊嶋貴副会長を議長として以下の議事が審議されました。

一、平成十二年度事業報告
二、平成十二年度決算報告
三、平成十三年度事業計画
四、平成十三年度予算
五、同窓会基金報告
（A）平成十二年度決算
（B）平成十三年度予算
六、別途積立金報告の件
七、その他
（A）推薦会員の件
（B）会員名簿発行の件

七号議案の（A）では昭和三十四年に入学（高十四回）され、二年後に転校された杉本百合（旧姓駒井）さんが会員に推薦されました。

十分な審議の後、全議案とも満場一致で可決・承認されました。

閉会の後、引き続き母校体育館で恒例の卒業周年祝賀式が開かれました。

本年は、中四十回（六十周年）、高三・併中一回・定一回（五十周年）、高十三・定十一回（四十周年）、高二十八・定二十六回（二十五周年）の方々をお招きしました。

祝賀式では、高四回卒で来年五十周年を迎えられる本橋道明氏より祝辞が述べられ、招待者への記念品贈呈の後、本年五十周年を迎えられた高三回卒長壁英雄氏より謝辞が述べられました。

また会場を別に移しての祝賀会では、往時を懐かしんでの交歓が和やかな雰囲気のもとで繰り広げられました。今回は特に高二十回の応援指導部の方々が参加して華々しいエールをお送りいただき、会が大いに盛り上がりました。

総会で挨拶する幡谷会長

総会で挨拶する三輪校長

総会開始前の会場の雰囲気

同窓会会長あいさつ ―土浦一高の諸君へ―

会長　幡谷　祐一

人間社会における礼儀は、車の潤滑油のような物で、物事のスムーズな関係もこれから生まれます。学校にあっては、まず生徒が教師を尊敬することです。そして、教師もまた、尊敬に価する対象であり続けるために、自分を磨いていかなければならないのです。

また、中国から輸入した漢字を、平仮名、片仮名と組み合わせて築いた一つの文化、日本語は本当に素晴らしいものと言えます。この言語の衰退が進む今、それを防ぐためにも、日本語の再発見というものが必要な時だと思っています。

私は今年、県内の中学校の生徒と教師、約十二万人に、「日本語のたしなみ」という小冊子を作って配りました。私たちが見過ごしていることや基本を網羅したもので、多くの学校からお礼の言葉などをいただきました。ある中学校からは、約二百人にのぼる生徒の皆さんの、お誉めの感想文を頂戴しております。

一高の生徒諸君も正しい日本語をしっかり身に付けてください。また、礼節を尊ぶ心を養い、そしてこの素晴らしい国、日本に生まれたことに誇りを持っていただきたいと願っております。

平成不況と言われて十年、不況脱出が困難に直面しています。

企業家も、町の商店主も必死になって、生きるために努力をしております。生徒諸君の父母も、兄姉も総て苦労していることはお判りのことと思います。

諸君のために懸命に働く姿を見れば、その恩に報いるべく、勉強に励むことが第一だと思われるはずです。幸いに、当校の生徒は俊才が揃っており、格別の力持ちであることは、津々浦々に遍く知られているところです。

しかし、学問よりも求められていることは、人となり、つまり人間性の問題であります。今、礼節をわきまえない若人が多く、これではこの国の将来が危ぶまれます。戦後、日本に対するアメリカの政策は、日本人を心、精神から崩壊させることでした。当初は百年の計画でしたが、五十年にして目的を達したと言えましょう。

新しい時代を迎えて

学校長　三輪　志郎

二十一世紀が幕を開けました。進修同窓会の会員の皆様方には、お元気でご活躍のことと拝察し、お慶び申し上げます。

本校も、創立百周年をお祝いした後、早くも四年目を迎え、一層の発展を期して新しい歴史を刻み始めています。

初めてご挨拶を申し上げますがこの四月の異動で、牛久高校から移って参りました。微力ではありますが、精一杯努めたいと思いますので、よろしくご指導ご鞭撻下さいますようお願い申し上げます。

着任早々に総会と卒業周年記念祝賀式がありましたが、各会場の熱気に、百年を超す学校の歴史の重みを感じました。その後、各地の支部会などにお招きを頂いておりますが、いずれも出席者が多く、実に和やかなのに驚いています。

東京支部の「東進会」では、盛会の最後に、お招き頂いた応援団リーダーの指揮と、吹奏楽部の生徒が演奏する伴奏で、全員が校歌の合唱になりましたが、中には目頭を熱くされる大先輩もおいでになり感動いたしました。

また、真壁では十年ぶりの支部会が持たれ、久々の開催にもかかわらず大勢の方が出席されました。今は廃線となった筑波線での通学を懐かしみ、話は止まるところを知らない盛り上がりで、ここでも最後は全員で校歌でした。

そして、九月八日には、国土交通省事務次官に就任された小幡政人氏の就任祝賀会が土浦市内で開かれました。高校十五回卒業の同期の皆様が催されたもので、ひときわ和やかな会でありました。小幡氏の栄誉あるお立ち場へのご就任を、改めてお祝い申し上げます。

このように、多感な青春の一時期を、同じ学舎で共に学び、磨きあったという思いは、言葉を要しない強い心の絆となっていることを感じ、声高らかに校歌を歌われる会員の皆様を拝見し、同窓会の盤石の様に大変感激しております。

そうした同窓会の皆様の格別のご支援をいただきまして、本校は遅滞なく教育活動を展開しています。ご厚情に感謝申し上げ、現状の一端をご報告申し上げます。

まず、全日制ですが、周辺三十余市町村六十余中学校から千五十五名の生徒が通っています。七十五名の教職員が指導に当たっていますが、残念ながら、昭和四十四年に設置された「理数科」が、県の少子化対策のために、この春から募集停止になりました。

教育方針としましては、全員が進学希望の本校ですので、直接的には、望む大学への進学の実現を目標とし、併せて、豊かな人間性を育むことを目指しています。そのための努力点として、本校の伝統とする学年主導体制を固め、一分を大事にする五十五分授業の重視、面接による個人指導の重視・勉学と部活動等の両立、自主性の育成等に努めています。

今春の大学入試では、東大合格者数は、三年連続三十の大台に乗り、三十二名と全国の公立校の第一位に輝いています。全体的には、国公立に二百二名(新卒・百二十四名)、私立大には六百二十二名(新卒・二百七十九名)が合格を果たしています。近年は、難関校への挑戦が多く、そのため再挑戦者が増える傾向が見られます。

部活動においても、硬式野球部が、市内大会で優勝し、サッカー部は、県大会三位に入賞し、将棋では全国大会で二位になるなど、文化・体育両部と同好会で四十余りが活動していて、放課後の校庭・体育館は活況を呈しています。

行事も、伝統の「一高祭」を六月一日から三日間開催し、三千人余の、史上最高の来校者を迎えました。その後、九月に「一高オリンピック」、十月に「歩く会」と三大行事が続きましたが、いずれも生徒の自主的な企画・運営によるもので、「文武両道」の伝統を受け継いでいます。

一方、定時制では、百十一名が学び、十一名の教職員（専任）が指導に当たっています。年齢は十五歳から六十一歳までと幅広く、個に応じた教育に取り組んでいます。大検によるものと通信教育での単位修得を合わせ三年で卒業する「三修三卒」制度の活用を奨励していて、この春は、十五人がこの制度で卒業しています。また、部活動では、陸上競技部の六名と男子バスケットボール部が全国大会に出場しています。

施設面では、情報化時代に対応するための、校内ＬＡＮの工事が完了し、この秋からは新体育館の建設工事が始まります。この十月から十四年十二月を工期として、鉄筋二階建、延べ面積三千五平方㍍で、位置はグラウンドの東角に予定されています。

新しい時代を迎え、社会は激しく動いています。教育改革が叫ばれ、昨年十二月に教育改革国民会議がまとめた報告を踏まえ、この一月には文部科学省が「二十一世紀教育新生プラン」を発表しました。さらにそれを盛り込んで「教育改革六法」が八月に成立して、本格的に改革が始動することになります。

当面の大きな問題としては、来年度からの「学校週五日制」導入と再来年度からの、新教育課程の実施があります。改定のねらいとして「学校週五日制」の下、「ゆとり」の中で「特色ある教育」を展開し、生徒に自ら学び、自ら考える「生きる力」を育成するとしていますが、自主性を重視するという点では、本校は既に先取していると言えるかと思います。また、「開かれた学校」づくりのため「学校評議員制度」を導入し、学校運営に地域の人の意見を聞くことや、地域への説明責任が求められることになります。

茨城県も、「二十一世紀の茨城を担う人づくり」を図るため、昨年「茨城教育プラン」を改定しました。これは予想以上に早い社会の変化に適切に対応するためのもので、「個性と創造性に富むこころゆたかな人づくり」を基本テーマとするものです。

本校としても、大学入試制度の変化を見ながら、今後「五日制」の狭められた時間の中でいかにして生徒に学力をつけ、人間性を育むかが最大の課題となります。これまで以上に授業を大切にし「ゆとり」をどれだけ活用するかが、目的の成否を分けると思われます。しかし、この六月には「大学の構造改革の方針」等が文部科学省から公表され、今後、再編・統合をはじめ大学自体も先行き不透明な状態にあります。

社会は、今後も更に変化が予想されます。科学技術政策研究所がこの七月に行った今後の「技術予測調査」では、ガンの転移阻止は二〇一七年、電気自動車の普及は二〇一四年には可能と予想されていますが生命科学・宇宙科学等の科学技術・情報通信技術の飛躍的な発展や高齢化・国際化の一層の進行が見込まれます。

こうした社会を生きる生徒諸君には地球規模で視野を広く持ち、高度な知性と豊かな人間性を身につけて、二十一世紀を担う気概を持って学んでほしいと思います。世の姿は変わっても一高に学ぶ誇りを自覚し、校歌に謳われる「寛雅の度量」・「至誠の精神」・「武勇の気魄」を体得し、会員の皆様の後に続くことを期待しています。

本校も、生徒の個性を尊重し、生徒が自ら学ぶのを支え、教育の不易と流行を見極めながら国際社会を担って活躍する人づくりに努力したいと思います。

最後に、進修同窓会のますますの発展と、会員の皆様の一層のご健勝を祈念申し上げましてご挨拶といたします。

目からウロコが落ちた話

旧制26回卒　東郷正延
(東京ロシア語学院院長・日本ユーラシア協会副会長)

(一)

今では加齢医学の専門家として知られる山浦玄嗣(はるつぐ)博士だが彼が東北大の医学部を卒業したてのころ宮城県黒川郡大和(だいわ)町の病院に勤務を命じられた。ある日彼の目の前に現れた「海のように青い目をした」青年患者が彼を驚かせた。祖先に白人はいるかと訊ねてもそんな事実は全くない。でも彼の家族や親類にも程度の差こそあれ彼のような人間は何人もいるという。そこで大和町や黒川郡内を調べたところ四二四人中で瞳の一部でも青い人が六五人(一五・二%)も見つかった。これに驚いて彼は色々考えてみたが、どうしてもその科学的根拠は掴めなかった。

(二)

話はガラリと変るが、年配の方なら誰でも子供のころ「桃太郎」のお話を聞かされた筈だ。桃から生まれた桃太郎が大きくなると黍団子を持って犬・猿・雉を家来にして鬼が島へ鬼退治に出かけ、皆で力を合せて見事に鬼を退治したというあの話。鬼退治といえば「大江山」も有名だ。調べてみたら大江山は京都府北部、丹後と丹波の境にある山で山中に洞穴があり酒呑(しゅてん)童子がここに住んでいたという。また能の「大江山」では源頼光(らいこう)らが山伏姿で大江山に入り、酒に酔いつぶれた酒呑童子を退治する。(「大辞林」による)―ところでこの鬼については日本民話の中に赤鬼・青鬼としてしばしば登場するが果してそんなものが居たのかどうか全く分らない。

(三)

民間にはそれぞれの分野に勝れた研究者がいるが私がこれからご紹介する笹谷(ささや)政子さん(旧姓岡崎)も正にその一人で一九四一年に上野の音楽学校ピアノ科を卒業しながら本業にはまったく目もくれず一九六九年には「『く語法』とトルコ語について」という論文を言語学誌に発表して知友を驚かせた。更に一九七〇年には「日本民族の起源(音楽的感覚から見た日本民族)」を発表したが遂に一九九〇年に至って彼女のライフワークともいうべき「異説・日本民族の起源」(上)が出版され、今では中巻、下巻も出版されている。それにしても既に八十二才にもなりながらその研究意欲はいささかも衰えを知らない。

ところで彼女の研究の核心はズバリ言って《日本民族三交替説》というもので従来日本民族単一説を信じて疑わなかった我が歴史学界に超特級の爆弾を投じたことになる。

彼女によれば日本がまだ大陸と地続きであった頃(約一万年前の旧石器時代)大陸から鋭利な石器を手に馬、野牛、ヘラ鹿などの獲物を追って遂に日本まで辿りついた青い目のハンター達(クロマニヨン)が日本の地に定住してその足跡を歴史に残すことになった。これら日本の第一の先住民族は言葉の上からはスラブ語族の縄文人で日本の気候が温暖化するに伴い大部分が日本から姿を消したが、その一部は日本に残って日本人と混血してその痕跡を止めることになった。

次にこれに代って暖かい東南アジアからトルコ語系の弥生・古墳人が日本の地に渡来して日本の歴史にその足跡を残すことになった。そしてトルコ語族の引き揚げた後に登場するのが朝鮮族だがこれは既に歴史時代のことなのですんなりと納得できるだろう。

(四)

最初の渡来者であるスラブ縄文人が日本に定住すると各地の南斜面に自生していた野ブドウを摘んで自力でブドウ酒を造った。これまで古墳とばかり思われてきたものが実はブドウ酒造りの道具であったことも判明している。ところで縄文時代人は日本人であれスラブ人であれ男女とも陰部を隠す位のことはしただろうが肉体の大部分は露出していた筈だからスラブ系白人がブドウ酒をがぶ飲みして暴れまわっている姿はこれぞ正に赤鬼という言葉がぴったりだ。ところが酒気を帯びず木影などに見え隠れしているような条件下では青鬼と呼びたくなる姿に見えたかも知れないと思うと先に(一)と(二)に書いてきたことが独りでに納得できる。正に火のないところに煙は立たなかった!そして私自身も笹谷さんのおかげで「目からウロコが落ちた」のである。余白が幾らもないが言葉の上から日本語中に見られるスラブ語の影響を見てみると例えば古い日本語「海神(ワダツミ)、海の原(ワダノハラ)」などはなぜそんな読み方をするのか全く不明だった。ところがワダはスラブ語のヴァダー(水)に由来することが分れば「ワダツミ」が「水の神、海の神」であることも分る。尾瀬などの地名もスラブ語のオーゼロ(湖)を切りつめたものと分れば納得がゆく。問題は語法だが「勿来(ナコソ)の関」の否定詞がなぜ語頭に位置するのかも古スラブ語の影響と分ればこれまた納得がゆくだろう。

(五)

私はかねてから小沢征爾という指揮者が日本国内はおろか海外にまでその能力が高く評価されていることがなんとも不思議でならなかった。背も高くないし黄色人種特有の容貌も西欧の一流楽団の前では余りパッとしないように思えてならなかった。ところがここでも目からウロコが落ちるような情報に接して今は自分の不明を恥じるばかりである。

最近は新聞などにもDNAという言葉を目にする機会が多くなった。私などは全く門外漢だから本当のことはよく分らないが要するに世界の各民族の遺伝子についての比較研究のようで、笹谷さんから送られてきた切抜きによると東京大学の医学部にDNA研究班があり永年の研究成果がアメリカの専門誌に発表された。それによると、なんと驚いたことにヨーロッパ諸民族に共通のDNA eu と同じものを日本民族の二十二%もが持っているという!仮に日本の人口を一億としても何と千二百万人である。ということは三味の音よりはベートーベンに代表される西洋音楽のメロディーにより多くの悦びを感じる人々が我々の周辺に幾らいても何の不思議もないことが立証されたことになる。ショパン・コンクールに優秀な成績をあげる日本人ピアニストが現れても今はすんなりと納得がゆく。そして小沢征爾がかつてカラヤンがその名をとどろかせたウィーン・フィルの専任指揮者の座につくと聞かされても今では「よかったね」と素直に喜ぶことができる。

それにしても日本民族の二十二%もが西欧人と同じDNAを持ちあわせていることのそもそもの原因がかつてスラブ語族の縄文人がはるばる日本に渡来した事実と密接に結びついていることに想到すると今更のように笹谷さんの研究の卓抜さに頭がさがるばかりである。

ロシア友好勲章を受章したロシア語教師 東郷正延氏

【略歴】東郷正延(とうごう・まさのぶ) 旧筑波郡小野川村館野に生まれる。土浦一高を1927年3月に卒業後、東京外国語学校(現東京外国語大学)露語科に進む。1931年大学卒業後、直ちに駐日ソ連通商代表部に勤務。東京外国語大学教授。NHKロシア語講座初代講師(以後11年間)。1962年、文部省在外研究員として訪ソ。1972年、ソ連作家同盟の招待で作家同盟大会に参加。1985年、国際ロシア語ロシア文学教師から「ロシア語の普及に貢献」によりプーシキン賞受賞。1988年、「露和辞典(研究社)」完成、出版。1989年、「露和辞典」の出版を祝いソ連作家同盟の招待を受け訪ソ。1990年、日ソ協会代表としてソ連最後の年に訪ソ。2000年7月、モスクワ訪問。2001年、日ロ友好勲章を受賞。現在、東京ロシア語学院院長、日本ユーラシア協会副会長。

恩師を訪ねて ⑥

数学　山崎　長次郎先生（現在九十歳）

（在職　昭和十五年七月～三十年三月）

私は明治四十四年五月生まれですから今年の五月で満九十年生きて来ました。九十年の生涯の中で最初の二十年間は社会に出る迄の準備期間、その後の五十六年間は学校に勤務して教員生活を、その後二十九年間趣味として日本の伝統芸能である能楽の流れを汲む観世流の「謡と仕舞」に熱中して現在に到って居ります。殊に本年五月ユネスコ（国連教育科学文化機関）が日本の能楽を第一回「人類の口承及び無形遺産の傑作」として宣言されました。これは能楽が日本のみならず「人類共通の宝」「世界にとっての貴重な芸能」と認められたわけです。能楽のもつ伝統の深さ、人間の心の機微の濃やな表現など、普遍性を備えた能楽が世界で理解され受け入れられた結果でありましょう。

「土中二十八回卒業生」

農村の小規模小学校複式二学級校でO校長先生の御熱心な進学指導を受け大正十三年四月県立土浦中学校に入学致しました。見るもの聞くもの別世界の如く感銘しました。黒の詰襟に有髭の臼井弘校長先生は如何にも古武士的風格が偲ばれました。ずっと後になって分った事ですが土浦中心街の大店の旦那衆の同好会に謡の会がありましたがそのメンバーの中に臼井校長の名を発見し成程と感じたことがありました。和服で通学が許された四月が終わると、上級生達の衣替えにはまだ一ヶ月も早いのに新入生だけは霜降の夏服で登校していました。一年生だけ百五十名が雨天体操場に集って校歌の指導を受けました。指導して下さったのは数学の坂入要之助先生が御趣味の横笛を吹いてなされたのには驚きました。六月になると全校生徒が霜降一色の夏服になりました。その当時学校には、つくば・さくら・かすみという三艘のボートがあって、平素からボート部を中心に練習を重ねていましたがこの頃になると恒例のボートレースが霞浦湖岸の田村天神下で行われました。学年対抗、クラス対抗、各部対抗等の熱戦に、幡幟を立てたり、上着を振ったり、蛮声を張り上げて歌った校歌の合唱に、一年生も参加することが出来て、漸く土中生としての一体感を味わうことが出来ました。

牛久市出身の文学者吉田弥平編輯の副読本を講義して下さった秋山忠老師（国語）が佐久良東雄の章の中で桜の名勝は土浦堤ではなくて桜川の源流磯部にあることを話されました。当時の交通事情から中学生にとっては余りに遠過ぎ何時の日か訪ねようと思い乍ら実現したのは四十年後、岩瀬高校長として赴任してからの事であった。校歌や能楽とも絡んだ磯部の桜については後述いたします。

田舎の小学校から出て来て初めて聴いた名士の講演、和装袴姿の川村理助師の「天行ハ健ナリ」のお話や土中の先輩矢口達先生のお話など印象深く残って居りました。

昭和三年六月、明治大学主催全国中等学校柔道大会に参加した柔道部が全国制覇を成し遂げ優勝旗を掲げて帰校した時の柔道部長山田常先生（国漢）の笑顔は忘れられません。

昭和四年三月土中二十八回生百二十名卒業。

「母校に勤務を命ぜられて十五年」（昭和十五年七月～三十年三月）

昭和十五年七月母校勤務を拝命して着任しましたが先輩として後輩の指導に全力を尽すべき責任を痛感して身の締まる思いでした。最初に担当したのは三年生（十五才）の数学（平面幾何）でした。わかり易い授業をモットーに努力した心積りです。第四十二回卒の皆さんは昭和の年号と年令が一致するので覚え易く数多くの俊才が卒業後社会に貢献する活躍の姿を楽しみに眺めておりました。在京の弁護士A君からは今でも年賀状を頂いて感銘しております。翌十六年四月に入学して来た第四十五回生は私が土中に着任して初めて組担任を務めた学年なので大変印象深く個々の生徒の記憶が鮮明に残っています。土中伝統の制服制帽に引換えて国防色の国民服・白線を巻いた戦闘帽・巻脚絆の通学姿だったが土中生としての自負心と大きな希望に胸を張り溌剌とした行動は頼母しい限りでありました。先輩としても十分に應えてやらねばと心を引き締める毎日であったが同年十二月には太平洋戦争に突入し、学校生活にも大きな変化を来たし、戦局の激化に伴って学徒勤労動員が実施されるようになりました。

私は十九年六月に海軍に召集されて学校を離れました。この学年が最も苦労した第一海軍航空廠の動員をお世話することも出来ず、又この学年が初めて出逢った四年制の繰上げ卒業式にも参列出来ず責任を完全に果せなかったのは大変残念でありました。にも拘らず今も毎年開催される四十五回生同窓会に御招待を受け、当時を偲ぶ機会を与えて下さる事は誠に有難い極みであります。

当時の戦況下、しかも海軍に応召の身には生きて再び還る望はなく、私の生涯はいずれ南海の果に焉るものと思い、八才・四才の二児を妻の手に托しての出征でした。幸にも神の加護により命助かり二十年十月再び学校勤務に復しました。

最後に在校生が校歌を歌う時の御参考までに、

◎校歌・磯部・能楽「桜川」

常陸国誌桜川の條に「磯部明神の社地より出、社木は勿論、一村の林すべて桜木となり、毎春落花水面に浮かぶを以て名づく」と記されています。次に磯部地区の桜樹については大正十三年若槻内務大臣の天然記念物指定を受けています。指定理由書に「古来桜花の勝地として謠曲に見えたるを以て其の名夙に著る。桜樹は東北産の品種に属する白山桜にて数百年を経たる巨大なるものあり。花色に淡紅を帯ぶるもの、花梗に毛のあるもの、花に芳香あるもの、多くは其特徴のある品種の一箇所に集るのみならず、関東に於て所謂関東桜の中に東北種の斯く美観を呈するは、啻に桜花の名所としてのみならず、学術上に於ても貴重なりとす。」とあります。凡て山桜は美しい若葉が花と共に出るのが特徴で、その姿は甚だ優美幽玄であります。その種類を列挙すれば「桜川匂・樺匂・初見桜・初重桜・青毛桜・青桜・薄毛桜・白雲桜・源氏桜・梅鉢桜」があります。

土浦堤に見る桜花は染井吉野で近年江戸の染井の地で開発された新品種で樹型も盆栽型、開花の時は花のみ賑かに開くタイプですが磯部に見る山桜は喬木が山の樹林に混じって花は若葉と共に開いて優雅ですから全く其の趣を異にします。磯部は盆地の中心にある台地ですから北には栃木県との境を作る仙頂山・高峰・雨巻山・富谷山があり、南には加波山の裏山が見えます。磯部台地北側の流れを遡り山口集落を過ぎると岩瀬町と笠間市との境界分水嶺鍬柄峠に達します。峠の麓の松林の中にひっそりと小さな「鏡が池」が二つ静まりかえっています。これこそ桜川の源水池であります。能「桜川」のクセの句頭に、「年を経て花の鏡となる水は散りかゝるをや曇ると言ふらん。」があります。單に磯部台地が桜の名所であるばかりでなく、周圍を取巻くこれらの山々には多種類の東北系山桜の巨木が自生し、春べになればそれこそスケールの大きな桜花の名勝絵巻が展開されたものと想像されます。この名勝地は平安時代既に京都の歌人達の歌枕に上って居りました。当時の交通事情など考える

と、遥かな吾妻の果てなる小河川桜川が都人の話題になったのか不思議に思われます。平安朝の代表的歌人であり、勅選古今集の選者である紀貫之の「常よりも春べになれば桜川波の花こそ間なく寄すらめ」は降って室町時代日本に初めて演劇を集大成した観阿弥・世阿弥父子殊に日本のシェイクスピアとも稱せられる世阿弥作の能「桜川」に取り入れられています。春べになれば展開されるスケールの大きな桜絵巻をバックに磯部を後場の主舞台に繰り展げられる能「桜川」は母と子の情愛物語で常陸を舞台にした唯一つの能であります。音曲の美・詩句の美・舞踊の美を併せ持つ名曲といわれます。殊に「網之段」と呼ばれる部分がありますが因みに現存二百余曲の中で段として挙げられているのは僅かに（十二曲）十三段あるのみ。桜川の名曲たる所以が肯かれましょう。校歌の作者は土中十一回生、関川村井関の出身堀越晋さん（御長男晋一さんは在東京で今年の三月に電話を頂きました）が四年生（十七才）の時、夏休みの課題として全校生徒に出された宿題の応募作品でありました。七五調三連ずつの詩句で

春の弥生は桜川
其の源の香を載せて
流れに浮ぶ花筏

平安歌人紀貫之の

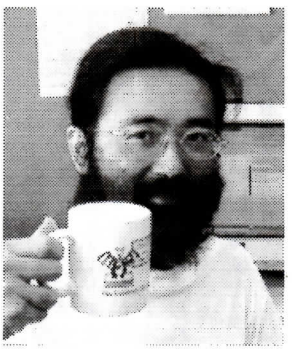
常よりも春べになれば桜川
波の花こそ間なく寄すらめ

を読み込んだ能「桜川」の古典の香りをも其の源の桜花の香りと二重映しにして、花筏に託して詩章に作ったものでありましょうか。校歌を歌う時その源の香を思い浮かべて頂けましたら望外の幸であります。

卒業生レポート ⑥

生命の連鎖―分子生物学の隆盛―

㈳科学技術振興事業団
（バイオインフォマティックス）研究員
太田聡史
高三十二回（昭和五十五年卒）



進化というと皆さん何を思い浮かべるでしょうか？　ダーウィン、自然淘汰、ガラパゴス諸島、系統樹、と言ったところでしょうか。少し生物学に詳しい方なら淘汰万能説、中立説、突然変異といった言葉を思い浮かべるかもしれません。私はその進化を研究しています。

この二十年程の間に分子生物学という学問が急成長しました。今や自然科学の主流は分子生物学であると言っても過言ではありません。有名科学雑誌の記事の半分で分子生物学を扱っている程です。

どうしてこれ程までに分子生物学がこれほど盛んになったのでしょう？　私はこの学問が直接人間と関わってくるからだと思っています。例えば私達はいつか必ず老いて死にます。生きとし生きるものは必ず死ぬ。私達はその命題を太陽が東から昇って西に沈むのは当たり前だと言うように、自然なこととして受け入れています。しかし分子生物学の世界ではこの命題はそれ程自明なことではありません。

実は死なない生物がいるのです。例えばガン細胞は死にません。死なないために、返ってその宿主を殺してしまいます。しかしガン細胞を宿主から取り出して栄養を与え続ければいつまでも生き続けます。ガン細胞は異常な細胞ですが、バクテリアのように自然界に数多く生息する単細胞生物も不死であると考えられています。別の言葉で言えば寿命がないのです。

でも人間はやはり死ぬ。皆さんはそう考えているかもしれません。ところが、進化的な観点から見るとこれも正しくはないのです。個体としての人間の寿命はたかだか数十年ですが、人間は自分の細胞の一つを次の世代に残します。新しい世代は両親由来の二つの細胞から出発して、胎内で発生の段階を経て個体として生まれてきます。ですからもし次世代に伝えられる細胞（生殖細胞）に注目すれば、ちょうどバクテリアがそうであるように融合と分裂を繰り返しながら、不死の生物として延々と生きて来たことになります。その寿命は、少なくとも三十億年以上と考えられます。なぜなら、一度でも生命の連鎖が切れてしまったら、その個体は現在存在しないはずだからです。

私達はその生殖細胞の進化を調べているのです。無論ある生殖細胞がそのまま何十億年も生きているわけではありません。実際に伝えられるのは生殖細胞の持っている情報なのです。それはコンピューターのハードディスクに入っているようなデジタルな情報です。私達はそのようなデジタル情報のことを遺伝情報と呼びます。人間の持つ遺伝情報は、最近ほぼ解読が終ったのですが、せいぜいパソコンのハードディスクに収まってしまう程度の量です。

正確に言うと私達は様々な生物の遺伝情報の進化を研究しています。そのような学問のことを分子生物学と言います。カエルの子はカエル、人間の子は人間であるように、遺伝情報は簡単に変わるものではありません。しかし、もし遺伝情報が完全に不変だったらこの世には人間はおろか、ハエのような単純な生物も存在しなかったに違いありません。原初の生物は、バクテリアよりももっと単純な、極めて原始的なものだったに違いないからです。

ではどうやって人間のような複雑な生物が生まれたのでしょうか。遺伝情報は極めて正確にコピーされて次の世代に渡されますが、時々間違いが起こるのです。間違いは多くの場合修正されますが、修正されないまま伝えられてしまうこともあります。その結果、親とはほんの少し異なる子供が生まれることがあります。そのような子供のことをミュータントと呼びます。もし、ミュータントが自分の子供を作ることに成功すれば、その新しい遺伝情報は次の世代に伝えられます。

私達はこのようにして蓄積された突然変異が、人間のような複雑な生物を作り出したのだと考えています。無論、その過程には気の遠くなるような試行錯誤があったに違いありません。進化の過程で、様々な理由で消えてしまった数多くの生物がいたことがわかっています。恐竜はいわばその代表格です。

私達人間も今でこそ万物の霊長として地上を支配していますが、いつまで生き延びることができるのかは誰にもわかりません。私達人間の最後の一人が死に絶える時、数十億年続いて来た人間の進化的な意味での寿命が終るときなのです。

さて、人間の個体としての寿命はせいぜい数十年だと書きました。しかし最近の分子生物学は個体の寿命を決めるメカニズムにもメスを入れつつあります。

「人は死ぬ」

「ソクラテスは人間である」

「ゆえにソクラテスは死ぬ」

この有名な三段論法が時代遅れになる日が、遠からず来るかも知れません。

【略歴】

昭和62年　放送大学教養学部自然の理解専攻入学
平成5年　放送大学教養学部自然の理解専攻卒業
平成5年　北陸先端科学技術大学院大学（JAIST）情報科学科入学
平成7年　北陸先端科学技術大学院大学情報科学科修了
平成7年　総合研究大学院大学（GUAS）生命科学専攻入学
平成10年　総合研究大学院大学生命科学専攻修了
平成10年　（財）遺伝学普及会情報資源研究センター研究統括本部分子情報研究部研究員
平成11年　Department of Ecoology & Evolution The University of Chicago ポストドクター
平成13年（社）科学技術振興事業団（バイオインフォマティックス）研究員

メールアドレス　soota@lab.nig.ac.jp

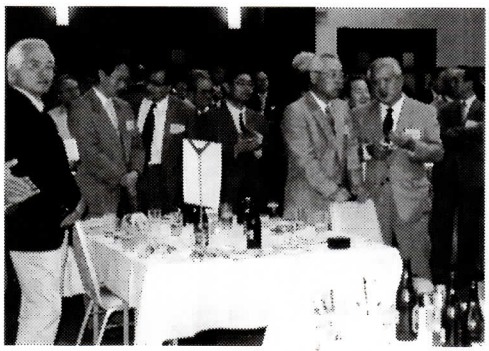
支部だより

東京支部（東進会）

今年の東進会総会・懇親会は、六月九日（土）午後一時から昨年と同じ神田学士会館で開かれた。三輪志郎校長、横田尚義進修同窓会副会長の他に恩師の和田隆先生や土浦一高昭和二九年卒の彫刻家一色邦彦氏らの来賓の他に会員一三〇名が出席した。

例年どおり、総会は、植木満会長の挨拶、大野金一理事長の活動報告、決算予算の承認、母校および進修同窓会からの近況報告のあと、アトラクションとして、土浦一高のブラスバンド部の演奏と応援部の演技が披露され、万場の拍手を浴びた。和田隆先生の挨拶で「こんなに感動したことはなかった」と述べられたように、母校の生徒によるジャズの演奏とブラスバンド部と応援部による応援歌、校歌の斉唱は、同窓生一同に青春時代を蘇らせ、感動の嵐を巻き起こした。

その感動がおさまらないうちに懇親会が始まったが、席上、一色邦彦氏から茨城県立つくば美術館に据えられた世界一の大きさのモニュメントの紹介や恩師和田隆先生の挨拶があった。歓談の合間に、蛯原芳和会員が編成する「オヤジ組」三人が「糸満海人」等を披露、元国連大学秘書室長ラビ・マリク氏の流暢な日本語による紹介に一堂拍手が湧いた。



最後は、応援部OBの指導による校歌を斉唱して、梅雨の合間の午後のひとときの幕を閉じた。

（東進会理事長　大野金一）

真鍋支部

母校の地元、真鍋支部では、会員の中で、勲章を受けますと、祝賀を兼ねて総会を開いてきました。

本年春の叙勲で、消防功労により松本好祐氏が（中四三回卒）が、勲五等瑞宝章の栄に浴しましたので、去る七月八日(日)プラザヘイアン土浦で、総会を開きました。

今年は、地域の催事等と重なって、出席者は二七名でした。

総会には、横田同窓会副会長、三輪学校長が出席されました。

総会は、会計報告と、退任の申出があった楢戸支部長と中西会計監査の後任に、支部長荒井忠司氏（高七回卒）、会計監査に清水隆氏を選任、総会出席増加方法（通知会員三七〇名に対し一割未満の出席）で、飯村弘氏から「国の重要文化財」になっている旧本館で、桜咲く四月に開いてはと提案があった。今後の事業は、来年同窓会名簿発刊に伴なって、支部名簿の作成と会費の徴収をすすめたい旨を述べ閉会した。

ここで、叙勲を受けた松本さんに記念品を贈呈、松本さんから「戦前の本土防衛の警防団、戦後の自治消防、現在の消防組織と市消防団長として、市民の財産と生活を守る責任の重さ」を語られた。

祝賀会では、松本さんの謝辞、出席者の近況報告、久し振りの出会いに時を忘れ、最後に、皆葉嘉宏氏（高一〇回卒）の音頭で校歌を斉唱し散会した。

（成嶋正芳記）

平成十四年度 進修同窓会総会の御案内

次年度進修同窓会総会・卒業周年記念祝賀式は次の通り開催します。

一、期日　平成十四年四月十四日(日)
　　午後一時

二、会場　土浦一高体育館

卒業周年記念祝賀式

卒業六十周年　中四十一回
卒業五十周年　併中二回　高四回　定二回
卒業四十周年　高十四回　定十二回
卒業二十五周年　高二十九回　定二十七回

一般会員・周年記念会員の数多くの会員の方が母校の門をくぐられることを期待しております。

尚、総会、祝賀式終了後、市内にて祝賀会（懇親会）を開催いたします。

『土浦中学　野球の記録』

中48回の色川弘・前野宗次郎両氏は本校野球部の歴史を研究、平成12年に「土浦中学　野球の歴史」を発刊し、草創期の中学野球の様子を知るうえでの貴重な資料となっている。

本年7月、両氏より［別冊］「土浦中学　野球の記録」が発刊された。前誌を補完する豊富な資料に往時を彷彿させる内容で、本校のみならず県内外の中学野球の貴重な資料であると思われる。

百周年記念誌
『進修百年』
（B5版一、〇九一頁）
―土浦中学・土浦一高百年のあゆみ―
価格三、五〇〇円
（送料別）
お問い合わせ
土浦一高進修同窓会事務局
〇二九八(二二)〇一三七

土浦一高ホームページ
アドレス
http://www.net-ibaraki.ne.jp/kou-055

お知らせ　お便り

卒業四十周年同窓会

進修同窓会総会並びに記念祝賀式の会場となった体育館は、すでに各回同窓諸氏の晴れやかな顔で溢れていました。広い会場のそこここで、知己を見つけては互いに歩み寄り、談笑の輪が広がる。卒業四十周年学年としてこの席に招かれた我々高校第十三回の卒業生も、皆喜々として解逅を楽しんでいました。

そんな中、応援団員の凛とした声が、会場に一瞬の静寂をもたらしました。一呼間の後、その静寂の気を揺るがして鳴り響くブラスバンドの前奏に導かれて、一高校歌が体育館一杯に響き渡りました。それはまさに、世代を越えて参会の同窓諸氏の心が一つになった瞬間であり、自然と熱いものが込み上げる思いでした。物故者への一分間の黙祷、会長挨拶と続いた後、今春、晴れて母校の校長として赴任した我ら十三回卒の学友三輪志郎君が学校長として挨拶に立ちました。ふと先刻、旧講堂の跡地に建つ「進修記念館」を見て感慨に浸ったことを思い出しました。母校百周年記念事業で建てられた同窓会館ですが、この設計を担当したのも我ら高校十三回卒の学友石川信廣君です。石川君のことといい、三輪君のことといい、我ら高校十三回卒業生にとっては、この記念すべき卒業四十周年のまたとない思い出となりました。

祝賀式では記念品なども戴き、大いなる感慨と感謝のうちに総会・祝賀式ともに無事終了し、引き続き午後四時から、霞ケ浦観光ホテルにおいて、高校十三回の同窓会が行われた。前回を上回る一〇七名の出席者で会場は立錐の余地もなく、互いに八年振の解逅を懐かしむ中、まず堀越幹事の挨拶、次いで富田昇先生のご発声を戴いて乾杯と続き、会場の空気は一気に和んでいきました。

喉もやや潤ったところで、ご臨席を戴いた恩師先生方からご挨拶を戴きました。今回ご臨席を賜った先生は富田、須田、池井、後藤の四方で、かつての我々との思い出や近況など、時にユーモアを交えながらのお話は昔と少しも変わらず、その溌剌としたお姿と張りのあるお声に接していると、一瞬、四十年前にタイムスリップしたような感慨を覚えました。

第13回卒業同窓会

皆々、豪華に盛られた山海の珍味を味わうことも忘れ、手を取り肩をたたきながらひたすら語らい、時に哄笑し杯を重ねる。思いは溢れ言葉は尽きず、歓談の声はいつまでも湖面に響き渡りました。

宴も長けて、恒例となった小松崎清君の力強いリードのもと、一高校歌を高らかに唱和し、歓を極めた至福の時に幕を下ろしました。

思えば私たちも来年は還暦を迎えます。風貌も大分それらしくなり、健康チェックも賑やかになって来ました。それらを踏まえ、できれば次回は早めの開催を願いつつ、再会を約して散会致しました。

（文責　清水浩）

卒業二十五周年同窓会

私たち、高校二十八回卒業生は、去る四月八日に開催されました平成十三年度進修同窓会総会および記念祝賀式に、卒業二十五周年記念学年としてご招待を受けました。

記念祝賀式の当日は、春の輝かしい日差しのさす、文字通り、春爛漫の日でした。正午過ぎに土浦一高の体育館前に集合、懐かしい友人達と共に祝典へ参加いたしました。卒業当時と全く変わりない体育館に入り、友人達と一緒に腰掛けていると、二十数年前の学生時代に逆戻りしたような錯覚にとらわれました。現役応援団によるすばらしい校歌斉唱など、とても感動的な祝典でありました。

同日午後四時から、私たちは、土浦京成ホテルにて同窓会を開催いたしました。数ケ月前から、代表幹事である小城君をはじめ、各クラス有志で数回の打ち合わせを行ない、連絡先名簿の作成や当日の日程などについて綿密な準備を行ないました。打ち合わせ会の段階から、同窓会をやっているような和やかな雰囲気でとても楽しく過ごせました。

その甲斐あってか、当日は同窓生約百四十人の参加があり、また、学年主任の大曽根先生をはじめ、七名の恩師の先生方に参加をいただきました。会場に入る前から、いたる所で歓声が上がり、大変な盛り上がりをみせていました。

会場では、恩師の先生方から、当時の思い出や近況などについてご挨拶をいただきました。中には、「おまえ達の学年は、授業態度は最悪だったが、人間的にはすばらしいやつが多かった。これからも、友人を大切にしなさい。」などとお誉め(?)のお言葉をいただき、大爆笑でした。同窓生有志によるバンド演奏、クラス毎の記念撮影など、本当に高校生活に戻ったような数時間があっと言う間に過ぎてゆきました。ほぼ全員参加の二次会も行なわれ、話のつきることのないとても楽しい一日でありました。

第28回卒業同窓会

このような素晴らしい同窓会を開催できましたのは、やはり、土浦一高のもつ素晴らしい伝統と同窓生であることの誇りによるものではないでしょうか。

最後になりますが、卒業二十五周年記念祝典を開催していただきました進修同窓会の皆様ならびに土浦一高の皆様に二十八回卒業生を代表して感謝を申し上げます。

（文責　塚原靖二）

一色邦彦「彫刻とデッサン展」を見る

奥村好太郎（高六回卒）

夏の一日、同級の有志二十二名がつくばに集い、つくば美術館で開催された級友の一色君の個展（七月二十日～八月十九日）を見学した。

若い時代のフォルムを追求した具象作品から、男女の機微をモチーフにした装飾性の高い最新作までデッサンを含めて展観された作品群を一堂に見ることができた。特に今回は、二十一世紀初頭を飾るにふさわしい宇宙に想を求めた高さ五㍍にも及ぶ大モニュメント「五大素天性」の素晴らしさに圧倒された。

母校だより

―第五十四回一高祭―
最高の一高祭を目指して

一高祭実行委員長　多田　敦志

「一高祭をよりよくしたい」単純な言葉ですが、これが僕達の願いでした。そのために昨年度の一高祭が終わるとすぐに準備を始めました。

とは言ったものの、初めは話し合いがうまくいかず、なかなか進みませんでした。

十二月になってようやくテーマが、「たまご～文明の足跡～そして…」に決まり、少しずつみんな準備に本腰をいれはじめ、活発な話し合いがされるようになりました。

その中で僕らは一高祭全体の雰囲気を統一するという考えにたどりつきました。そのために校舎の装飾を大幅に増やし、また壁画で「万里の長城」をつくるなど、様々な部分で見直しが成されました。

そうやっていくうちに、どんどん時間が過ぎていき、三学期を過ぎると本当に忙しくなり、休む時間がなくなりました。一高祭が近づくにつれ生徒も準備で忙しくなり学校全体が一高祭のムードになっていきました。

一高祭当日の三日間は、長い準備期間に比べて本当にあっと言う間でした。天気にも恵まれ、聞いた話によると、入場者が過去最高であったそうです。

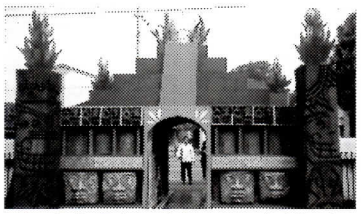
宇宙をイメージした体育館では独特の世界がつくりだされ、評判の高かったミュージカルをはじめとして、軽音楽ライブや吹奏楽部の演奏などが行われ、また、マヤ文明をモチーフにしたゲートは、異例の早さで完成し、大成功を収めました。広場では、廃止するかどうかまで話し合われたMｰSQUAREが根強い支持によって行われ、各クラスでは独創性にあふれた企画が展開されていました。

一高祭の盛り上がりは後夜祭が終わるまで続きました。この三日間が長い間積み重ねてきた努力の集大成であったと言える結果となりました。

早いもので、一高祭が終わってから数ケ月が経ちました。すぐには分からなかった「成功」の二文字もだんだん実感がわいてきて、今では「今までで最高の一高祭」であったと思えます。僕はこの一高祭にこんなにも深く関われて本当によかったと思います。

しかし、僕達が数多く話し合ってきた中で、実現できたのはほんのわずかです。「今までで最高」であっても、結局は「今までで最高」でしかありません。

もう後輩達が来年度の一高祭の準備を始めています。僕達が残したものを受け継ぎ、よりよくして「今まで以上の」一高祭をつくりあげてくれることでしょう。今後の後輩達の活躍と、更なる一高祭の発展を心から祈っています。


マヤ文明をモチーフにしたゲート

また、今年の一高祭が少しでも多くの人の心に残り、素晴らしい思い出であり続けることを願います。

―第二十四回一高オリンピック―
オリンピック運営を通して学んだこと

一高オリンピック実行委員長　戸谷雅治

今回の一高オリンピックが開催されるに当たって、委員長である僕は、ほとんど何もしなかった。中心となるべき人物がそんなだったので、当然準備は捗らず、非常に切羽詰まっていた。その上オリンピック当日、部活動の関係で僕は出られないかも知れないという最悪の事態になってしまった。幸い、台風の影響で都合がつき、当日はなんとか出場できたが。

当日は早々に自分の出場する種目が終わり、あとは本部で待機し、得点の整理などをしていたが、ここで準備を怠ったツケが来た。種目がスムーズに運ばないことに気をもみつつ、トーナメント表の記入ミスを修正し、ルールが統一されていないと先輩方に不満を言われ、本当に散々だった。

しかし、最後の綱引きの盛り上がりから、クライマックスのリレーへと移り、終わってみれば「めでたし、めでたし」と言った感じであった。

今回の一高オリンピックは不備な点が多々あり、本当に申し訳なかった。しかし、最後まで楽しんでくれた生徒の皆さん、多くのミスをカバーして下さった先生方、委員長をよそに頑張ってくれた実行委員の皆さん、ありがとうございました。来年度は、今回の数多い問題点を修正し、より素晴らしい一高オリンピックにしてくれることを期待しています。

理数科夏季特別実験講座
ホログラムに参加して

二年　羽鳥　裕子

七月十七日、私達は理数科夏期特別実験講座に参加するため筑波大学へ行きました。筑波大学は森のような広大な敷地の中にあり、想像以上の素晴らしさでした。

筑波大学に着いた私達が最初に行ったのはノーベル賞を受賞された朝永振一郎博士の展示室でした。朝永博士が使われた筆記具や書籍が展示されていました。その後、二人の先生による光と電気を通すプラスチックの講義をうけました。

班別行動では私はホログラムの実験班に参加しました。ホログラムを作る為には暗くなくてはならず、真っ暗にできる実験室で実験＝写真＝を行いました。ホログラムというと紙の上にあるとうイメージがありますが実験ではガラスの上に作ることになりました。そして私は暗闇の中でガラスを切ることになりました。私がそこで驚いたのはガラスに一本の傷を付けるだけで、そこからキレイにガラスが折れることです。

全てが初めての経験だった私達に担当の先生が、優しい言葉でわかり易く教えてくださったので、実験は楽しく行うことができました。完成したホログラムを見た時はその素晴らしさに感動しました。

共宿で得たもの

共同宿泊学習実行委員長　河野直樹

四月七日に、土浦一高に入学してから三ケ月、友人達とも親しくなってきた時期に、共同宿泊学習は行われました。この共宿は、一日目に環境問題についての体験学習、二日目は尾瀬散策、三日目はクラス毎の自由企画が行われました。三日間を内容の濃い、充実した時間にするために、僕達は二ケ月以上前から計画・準備を進めました。

特に一日目の企画については、共宿委員を中心に、テーマの決定・関係機関との連絡・事前研究等に取り組みました。各クラスの企画も、公害についての研究・植林・自然保護の実態調査等多彩で内容の濃いものになりました。この事前研究、そして共宿での体験を通して、僕達は環境問題の重要性を再確認しました。

また、二日目、尾瀬の豊かな自然に触れたことも貴重な体験でした。植物図鑑で高山植物について調べ、自然の美しさ、大切さを実感することができました。

さらに二日目の散策、三日目のクラス企画では、クラス全員が心から楽しみ、クラスの団結・親睦を深めることができました。このように充実した共宿を体験することができました。

クラス全員が参加してそば打ち

先生方をはじめ、多くの方々のご協力のおかげだと思います。本当にありがとうございました。

職員室だより

理科

本年は、生徒に人気のあった長瀬校長先生（高一一）、長らく一高の物理教育の中心であった山口金三先生（高一一）がご退職なされ、また、化学の阿内先生が研修センターにご栄転なされました。代わりに、那珂高校より綿引隆文先生、並木高校から臼井健司先生をお迎えいたしました。一年は生物横田・槙野・臼井、二年は物理綿引・松山、化学臼井・原田（高二〇）・高橋、三年は物理結城・松山、化学飯竹（高三一）・原田、生物槙野・横田の九名の先生方及び三名の実習講師野田、小島、染谷の十二名のスタッフから成っています。高橋先生は、手作りの化学の実験道具を作成されわかり易い授業を展開なされています。原田先生は、理数科主任として今年茨城県で開催された全国理数科教育研究大会の中心となって活躍なされました。結城先生は理科主任・図書部長として活躍されています。綿引先生は2Bの担任として、また、本質的な物理教育の展開に努めていらっしゃいます。臼井先生は1Bの担任として、また、趣味がマラソンや登山ということで元気な毎日を過ごされています。横田先生は、今年から、第一学年の副主任になられ、毎日精力的に学年経営にあたられています。飯竹先生は、3Iの担任として細やかであたたかな生徒指導に努められています。槙野先生は、3Fの担任として緻密で計画的な学級経営にあたられています。松山先生は本校のインターネットを作成されています。日々慌ただしい生活ですが、その中に、三人の女性の先生方が安らぎを与えてくれています。今後も忙しさに埋没されないで余裕の精神で大局的に考えていくことが大事なのではないでしょうか。

体育

本校体育科職員六名は同じメンバーで五年目を迎えています。体育の授業は一年生は中江先生、二年生は谷口先生（二年担任）、三年生は山越先生（三年担任）を中心に、選択制を取り入れ、希望する種目に積極的に参加し、活動できるように行っています。保健は一年が中江、山越、谷口先生、二年が堤、大村、大浦先生で担当し、両学年で課題学習を行い、保健に関する諸問題について調査、研究し発表する、という授業を行っています。

また、堤先生は生徒指導部長、中江先生は副部長、大村先生は保健部長、山越先生は副部長、そして大浦先生は同和教育室長と教科外でも多忙な毎日を送っています。

そして、各先生とも放課後には顧問として各部の活動を熱心に指導しています。本年はサッカー部が県で三位に入賞し、野球部は春、秋ともに地区予選を勝ち抜き、県大会に出場するという活躍をし、大変うれしく思っています。

最後になりますが、本校の目標である「勉学と部活動の両立」を目指し我々職員一同、益々頑張っていきたいと考えております。

部活動だより

硬式野球部

二年　吉松　公平

私たち硬式野球部は、選手とマネージャー合わせて四十七人、山越監督と酒井部長の指導のもと、毎日練習に励んでいます。今年度は、部員も今までにない大所帯の中で、近年にないすばらしい成績をあげることができました。

春季大会では、土浦湖北高校を激戦の末延長で破り、十五年ぶりに県大会出場を決めました。また、土浦市内大会でも初優勝し、その勢いのまま、夏の大会に挑みました。そして、この大会でも一、二回戦と圧倒的な強さで勝利し、三回戦鉾田一高との試合では、一進一退の攻防をくり返し、あと一歩の所で涙を飲んで、打倒シード校の夢は散ってしまいました。

新チームになってからも、夏の大会でのくやしさを忘れずに練習を重ね、秋季大会でも県大会出場を果たしました。

これからシーズンオフの冬になり、来春へ向けてのトレーニングになります。しかし、体育館新設のため学校のグラウンドが使えず、佐野子のグラウンドを借りることになります。今まで以上に練習が制限され、厳しくなると思いますが、それに負けずに頑張っていきます。

現状のチームに満足することなく、自分たちの力を伸ばし、先輩の成績を越えられるよう厳しく、それでいて楽しく練習をしていきたいと思います。これからも応援よろしくお願いします。

頑張る一高生

将棋部（全国高校将棋選手権大会準優勝）

二年　泉對　直子

トーナメント表を見た時、「運が悪い。」と思った。近くに優勝候補が何人もいたのだ。優勝するには、どんな強豪にも勝つ必要があり、「運」など関係ない。しかし、私はどうしてもベスト4に入りたかった。この大会でベスト4に入ると高校竜王戦に参加できる、という条件があったからだ。竜王戦とは、男女混合の全国大会だが、男女には実力の差があり、女子が県代表として参加することはほとんどない。そんなレベルの高い大会に、私は出たかったのだ。今までの大会では「楽しむ」ことが目標だったが、今回は初めて「順位」にこだわり「勝ち」を意識した。

そして、苦しみながらもベスト4入りを決めた時、うれしさの余り笑みが溢れてきた。それと同時に目標が「ベスト4」から「優勝」へと変わった。目標を果たすと、その後がいい加減になるのではないかと心配していたが、目標が自然と変わってくれた。

準決勝では、投了しそうになった局面もあったが、自分でも驚くような一手を発見し勝利。

そして、いよいよ決勝。しかし、何度も勝ち筋を逃し、負け。勝負手を逃した自分への怒りからか、今でもまだ悔しい。しかし、以前よりも将棋が好きになった。どんなに負けていても、勝ちへのチャンスがどこかに隠されていることが身に染みて分かったからだ。やはり、将棋にはやめられない面白さがある。

囲碁部（全国大会出場）

二年　高嶋　泰夫

囲碁部は部員不足が深刻で、最近は三人で組む団体戦に出場できない状況が続いていました。しかし、去年の秋に副将の野末、春には一年で三将の川上、と部員が増え、夏の県団体戦では優勝し、全国大会にも出場できました。全国では初戦を突破し、大きな自信をつけることができました。部員数は多くありませんし、囲碁歴も長くはない者がほとんどですが、なかなか粒ぞろいで実力が拮抗している良いチームだと思います。幸運にも今年の全国経験者は全員来年に残ります。来年は今年以上の力で臨むことができるでしょうから、再び全国に出場して、優勝を狙っていきたいと思います。

合唱部（全国大会出場）

二年　高柳　慧

八月二日、本番のステージの上で僕は何とも言い難い気持ちが体中を満たすのを感じた。この上無い高揚感と充実感、そして感動。僕は生涯この日のことをきっと忘れないと思う。思い起こせばあの日へ向けての練習の日々は、決して楽なものでは無かった。歌自体の練習もさることながら、合同出場校との摩擦にも悩まされた。幾度くじけそうになったか分からない。けれど、その度に僕らは励まし合い、支え合って頑張った。純粋に音楽を愛する者の一員として恥じぬよう。その努力が報われたあの瞬間を忘れられるわけが無い。だからあの瞬間のあの想いは生涯において意味を持ち続けると今は思う。

東大合格公立高校全国第一位に輝く

―難関大志向強まる―

平成十三年度入試報告　進路指導部

平成十三年度入試では、東大三二名（新卒二四名）、筑波大四二名（新卒三五名）が合格しました。東大合格数三年連続で三十の大台に乗せ、全国公立高中第一位であり、筑波大合格数は全国第一位を堅持しました。京都大に九名（新卒五名）の合格を出したことは、本校生の難関大志向に一層の道筋を開くものとして賞賛に値しますし、筑波大医学専門学群の五名を含めた国立大医学部合格者数十二名という数字も立派な実績であります。

私大の方では慶応大四八名（新卒二二名）、早稲田大一〇八名（新卒六二名）、上智大二二名（新卒一四名）、東京理科大八七名（新卒三〇名）の合格者を出し健闘しました。特に早稲田大の数字が光ります。国立大合格者の総数では一九二名（新卒一一九名）にとどまりましたが、内容的に充実した数字であると言えます。公立大・私大等を加えた合格者総数は八三二名（新卒四〇八名）で、五月一日現在、新卒生の進学者数は前年比二〇名減の一九二名となっています。

ここ数年指摘されてきた難関大志向の増加は今年も顕著で東大・京都大の受験が多かったのが、特徴です。

難関国立大を第一志望として他は受験しないか、私立大併願をするが、早稲田・慶応・上智あたり以外では合格しても進学しない、という構図が徹底してきていまして進学者数の減少に拍車をかけるかたちとなっております。

慢性化する不況の中、世は挙げて浪人回避へと動きつつある中で本校は浪人増加の傾向です。一年くらい浪人しても第一志望を貫徹した方が良いという判断が根拠になっています。したがって、本校生が希望する難関国立大や有力私大により多くの合格者が出ない限り、進学者数減少に歯止めはかからないと思われます。

私大の方も早稲田の合格者が多く出ましたが、慶応・東京理科・立教・法政大などの合格率が下がっていて、気になるところです。

浪人生の方は一五三名のうち、一三九名が進学しました。東大・京都大・東工大・一橋大・東北大・筑波大・早稲田大・慶応大および国立大医学部などへ多くの合格者が出ていて、雌伏一年の苦労が偲ばれますが、すべてが第一志望を貫徹出来たわけではありません。むしろ、第二の策として主要私大を併願し、合格できた所に入学するという現実的組み立てを実行している者が多くなっています。

本校生が志を高く保ち、果敢に難関大受験に挑戦し、合格していくのは大変喜ばしい限りですが、希望に見合う実力養成という厳しい試練に直面しているのも否めない事実であります。

平成13年度入試合格状況

国公立大学

大学	合格者	新卒
北海道大	8	3
東北大	19	11
茨城大	14	10
筑波大	42	35
千葉大	13	4
お茶の水大	5	4
東京大	32	24
東京外語大	2	2
東工大	9	4
一橋大	3	2
横浜国大	4	4
名古屋大	1	
京都大	9	5
旭川医科大	1	
福島大	1	
埼玉大	1	
電気通信大	5	3
東京医科歯科大	1	1
東京学芸大	2	
新潟大	2	1
富山医薬科大	2	

大学	合格者	新卒
浜松医科大	1	
山梨医科大	1	
信州大	2	1
大阪大	3	1
山形大	1	1
群馬大	1	1
東京商船大	1	
東京水産大	1	1
東京農工大	2	
静岡大	1	
国立大計	192	119
茨城県立医療	3	1
東京都立大	3	3
横浜市立大	2	
大阪府立大	2	1
公立大計	10	5
防衛大	3	2
防衛医科	3	1
大学校等計	6	3
国立短大計	0	
私立短大計	2	2

私立大学

大学	合格者	新卒
青山学院大	22	16
学習院大	17	8
慶応大	48	22
国際基督大	7	5
上智大	22	14
中央大	30	16
津田塾大	7	3
東京女子大	7	4
東京理科大	87	30
日本女子大	8	2
明治大	42	20
立教大	26	10
早稲田大	108	62
法政大	20	9
同志社大	7	4
立命館大	10	5
日本大	20	7
東京電機大	11	4
私立大計	622	279
合格者総計	832	408

進修同窓会会務分担 (平成13年度)

1．本部

担当	本部役員		学校	主な業務
総務	豊嶋	木島　説田　小野(慶) 谷中　中川	教頭 校内幹事	会議の招集・設営・進行 同窓会の総括的業務
経理	青山	小野(治)　石川　渡辺 柴沼　小城	事務部 校内幹事	予算編成と執行・決算 諸会費等の徴収
会報	横田	木島　谷中　堀越　宇田川 宇田　鈴木(志)　鈴木(淳)	教頭 校内幹事	会報の編集・発行
名簿	大曽根	梅澤　小網　柳沢　野村 草刈　小城	教頭 校内幹事	名簿の編集・発行 会員の情報収集・整理
事務局	横田 大曽根 桜井	谷中　野村	教頭 校内幹事	事務局と相互連携
監事	平田　田嶋			本会会計の監査

2．支部

支部会等に際して、本部に対し出席要請がある場合は、会長又は下記の副会長のうち1名が、校長（または代理）とともに出席する。ただし、遠隔地の場合にはこの限りでない。

豊嶋、横田、大曽根、青山、植木、幡谷(浩)、桜井

3．進修同窓会校内幹事

高22 山田　修(国語)　高30 山越　好宏(保体)　高32 原　光広(英語)
高36 日向　久(英語)　高12 矢ノ中芳夫(事務室長)　秋田　剛(係長)

進修同窓会基金管理委員会

進修同窓会会長	幡谷祐一		(中40回)	
委員	11名			
進修同窓会副会長	4名	豊嶋　貴	(中37回)	
		横田　尚義	(中44回)	
		大曽根宏亮	(高4回)	
		桜井　光孝	(定4回)	
全日制教頭	1名	齋藤　勝	(高15回)	
事務室長	1名	矢ノ中芳夫	(高12回)	
その他	5名	青山　和義	(高8回)	副会長
		三輪　志郎	(高13回)	校長
		木島　幸夫	(高1回)	本部監事
		谷中　良雄	(高12回)	〃
		野村　ルナ	(高15回)	〃
監事	2名	平田　公敏	(併中2回)	
		田嶋　栄吉	(高11回)	

平成12年度 進修同窓会決算書

収入額　一金　24,652,793円也
支出額　一金　12,881,358円也
差引残高　一金　11,771,435円也

【収入】　単位：円

	項目	予算額	決算額	比較増減	備考
1	繰越金	12,015,324	12,015,324	0	前年度繰越金
2	終身会費	100,000	30,000	△70,000	
3	年会費	7,000,000	10,569,500	3,569,500	
4	入会金	1,930,000	1,930,000	0	新会員全・定386名×5,000円
5	寄付金	0	100,000	100,000	第27回卒業生一同より
6	雑収入	4,676	7,969	3,293	預金利息
	合計	21,050,000	24,652,793	3,602,793	

【支出】

	項目	予算額	決算額	残額	備考
1	総会補助	700,000	655,702	44,298	資料、会場設営外
2	会報発行費	4,000,000	3,350,982	649,018	会報印刷代、送料
3	通信費	300,000	29,120	270,880	はがき代他
4	卒業記念品費	200,000	160,000	40,000	卒業証書用筒代
5	卒業60,50,40,25周年記念品費	400,000	400,000	0	テレホンカード積立
6	会議費	500,000	98,611	401,389	
7	支部連絡費	300,000	201,260	98,740	支部会補助
8	生徒奨励費	1,200.000	1,205,000	△5,000	生徒会補助他
9	別途積立金	6,000,000	6,000,000	0	積立会計へ
10	慶弔費	100,000	65,000	35,000	
11	事務局費	1,000,000	434,667	565,333	サラト事務処理費他
12	旧本館管理補助費	300,000	281,016	18,984	
13	予備費	6,050,000	0	6,050,000	
	合計	21,050,000	12,881,358	8,168,642	

上記のとおり決算しました。　※項目間の流用を認める。

平成13年3月31日

茨城県立土浦第一高等学校進修同窓会会長　幡谷　祐一

監査の結果上記のとおり相違ないことを認めます。

平成13年3月31日

監事　平田　公敏　印
監事　田嶋　栄吉　印

「会員名簿」の発行と取り扱いに関するお願い

本会では来年の夏、同窓生相互の連携並びに、各分野でご活躍の母校関係者の、さらなる発展等を祈念し、会員名簿を発行しますが、プライバシー漏洩等に配慮し、取り扱いには細心のご注意をお願いいたしております。

また、学校名、個人名、あるいは業者名を名乗り、名簿作成を口実に、電話による住所、電話番号等を問い合わせる事例があるようです。学校、同窓会では、電話での問い合わせは一切しておりませんので、併せてご注意願います。

会費納入のご報告とお願い

平成十二年度の会費納入状況は、三月末現在、三、二五二名の皆様から、一〇、五九九、五〇〇円を頂きました。

今年度も納入して頂きたく、振替用紙を同封いたしました。会費は同窓会事業費に充てられますので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

編集後記

闇の中でも、その一角だけ、ほんのりと強い芳香が立ち込めている。毎年、九月下旬、その香りは忘れることなくやってきます。学校の玄関脇のキンモクセイ。

そして、十一月には、この会報が完成し、皆様のお手許にお届けできるのではと考えています。

本58号のために、各方面の多くの方々のご協力をいただき、貴重な原稿、写真等を寄せていただきまして、ここに厚くお礼申し上げます。今後とも進修同窓会をよろしくお願い申し上げます。

◇　◇　◇

進修同窓会報58号
発行日　平成十三年十一月一日
会報編集委員会
編集長　横田尚義
編集委員　木島幸夫　谷中良雄
堀越　博　鈴木志郎
宇田川仁一郎
宇田邦利　鈴木淳一
校内　〃　齋藤　勝　山田　修
〃　山越好宏　原　光広
日向　久